

## 外国人から見た謙遜の文化

Bodnar Peter Bela (ハンガリー)

「いや、とんでもないです」と誉められたあとの日本人が言うのをよく耳にする。「お上手ですね」や「頭いいですね」と言われるのは果たしてそれほど「とんでもない」ことであろうか。

言うまでもなく、その裏には「謙遜」の文化がある。世界中どこでも謙遜したほうがいい場合があると思うが、日本は謙虚な振る舞いや話し方を特に重視するように思われる。欧米人からすると、その程度は甚だしく、実におかしい場面を生み出すことも少なくない。誉められたら普通に「サンキュー」などで済ましてしまう欧米の人の中には、毎回誉め言葉をきっぱりと打ち消し、自分のことを常に悪く言う日本人のことがよく分からない人もいるであろう。そしてこれは序の口で、日本人は自分を悪く言うばかりか、自分の周りのものも同様にへりくだっているのが普通なのである。自分の仕事の成果を「愚作」などと言うのはもちろん、妻のことを「愚妻」、子どものことを「豚児」という謙讓語の表現までである。また、一般的な言葉でも自分の妻や恋人を悪く言うのも日本のマナーと言える。例えば、知り合いの韓国人の女性は、日本人の彼氏が共通の友人に「彼女は全然料理をつくらない」や「彼女がかわいくない」と言ったところ、怒ったこともあるそうである。これは海外ではありえないのである。

では、どうして日本ではこれほど謙遜が求められるのであろうか。その主とした原因はおそらく集団意識の強さにある。個人主義の欧米では、人々は堂々と自分のことや意見を強調するのに対して、日本では他人に気を配って、皆と同様に振舞うのは非常に重要なことである。傲慢に受け取られるようなことを言ったら嫌われる可能性もあるし、また、「出る杭は打たれる」と言うように、皆と違う人は社会的に損をするようになっているのである。

一方、相手に劣等感を帯びさせたくないの、自分の成績をあまり高く評価しないことによって相手を安心させる。他方、人に妬まれたり、嫌われたりしたくないので謙遜は自己防衛の手段ともなる。更に、相手に尊敬を表したい時は、自分をへることによって、相手と自分の差が一層大きくなり、尊敬の意はよく伝わる。

しかし、上述のとおり謙遜や謙讓語は有力な社会的な潤滑剤であるとしても、個人にとってはどのような影響があるのであろうか。自己啓発系の文学や成功に関する文献においては、自分に言い聞かせるメッセージの大切さがよく取り上げられる。どのような考え方をとるかによって、人生の中の勝負や成否は大体決まるとされているのである。また、頭の中だけの暗黙の考えよりも、言葉にした考えのほうがずっと力強いものだと考えられている。つまり、「俺ならできるぞ」というようなポジティブな自己対話をすると、実際にできる可能性は一段と高まるということである。

それに対して、謙讓語というものは、自分をへりくだる、ネガティブな話し方である。建前だとしても、口にする言葉は常に「いや、私は全然駄目ですよ」とか「とんでもないです」とか「私にはできません」というような言葉だったら、それは自信や成功率にも悪影響を及ぼすはずである。このように考えると、謙讓語は日本人にとって大きな心理的な負担になるのではないであろうか。

また、日本の謙遜の文化においては、筆者には矛盾に見えるところもある。その興味深い例を二つ挙げておきたい。

第一は、日本の学生がテストの前に「全然勉強していない」と言う習慣である。日本人と謙遜について話すと、この例がよく挙げられるので、謙遜といえばこれが最初に思い浮かぶようである。それはつまり、必死にテストに準備したにもかかわらず、テストの寸前に悩んでいる皆さんに自分が「全然勉強していない」と言うことである。それは相手を安心させるために、謙遜のつもりで言う。しかし、テストにいい点が取れたら、結果的には自分が「全然勉強していない」のに、それほどいい点がとれたということになり、自分を天才に見せかけることになるのではなかろうか。また、低い点数を取ってしまった相手は（その建前の言葉を真に受けるとしたらであるが）、自分が一生懸命勉強したのに、「全然勉強していない」人は皆、自分よりいい点を取れたと分かったら、劣等感を覚えるのではなかろうか。こういうことを考えれば、この典型的な例として挙げられる決まり文句は、実は謙遜とは正反対の働きををすると思う。

第二は、筆者の経験した限り、国のことになると、いつもの謙遜はどこかへ消えてしまうのである。普段は謙遜している日本人の方は外国人を前にしても「やっぱり日本が一番いい」とか「やっぱりそこは日本じゃない」とか言って、いかにも世の中には日本しかまともな国がないというような発言をする。また、「お上手ですね」と本人を誉めると「いや、とんでもないです」と謙遜する同じ日本人に「日本は大好きです。日本は治安がいいし、人が優しいし、食べ物もおいしいです」というと、にっこりとして頷きながら、「もっと誉めてね」と言わんばかりの態度をとる場合が多い。

実はこの面では、自国のハンガリーは日本の対極だと言えよう。ハンガリー人は自慢に対する抵抗は日本人ほど強くないので、ある程度個人の自慢をしても特に問題がないとされる。逆に、悲観的でネガティブで後ろ向きだとよく批判されるハンガリー人、特にインテリの方は、ハンガリーという国家のことになると、それをののしるばかりである。「この国はだめだ」や「ここは悪いことばかりだから、ここには住めない」と常に文句を言っているのである。こういう惨めな態度はハンガリー人同士の皆に変えてもらいたいのが本望であるほどである。

話を戻して、日本のことをさらに考えよう。戦後の日本は日の丸や『君が代』をあまり使わないようにしており、普通の国より愛国心が薄くなっているかのように見えるが、上述したとおりの自国にかけている誇りは日本人の潜在的な愛国心にもとづいているのではなかろうか。だが、愛国心を持つこと自体は、けっして悪いことではないと思う。他の諸国の人も自国を誇りに思っており、日本は経済を初め、文化や技術など実に見事に発展しているところがまさしく多くある。指摘したいのは、他者に対して自分をへりくだり、家族もへりくだり、自分の会社もへりくだって言いながら、話は国のレベルになると逆に自慢話になるのは違和感を招きかねないということである。

この現象の理由も考えてみよう。なぜ国のレベルには謙遜がいらぬのか。その原因は「謙遜の力学」にあるように思う。謙遜にはいつも「外」の人を相手に「内」の人やものをへりくだるというような力学があるのだ。例えば家族内の話なら、「お父さん」や「お母さん」というように、敬意を込めて言うのであるが、家族以外（例えば会社や友人）の人と話すと、単に「父」や「母」になってしまう。社内なら、「田中部長がい（らっしゃい）ますか」になるが、社外の人と話すと同じ田中部長について話すと「田中はおりません」というように謙譲語になる。次々と一歩ずつ外の「領域」（家族・友人・部署・会社など）を辿ってみると、謙譲語が通じる範囲では最終的に全部を包括する領域は日本そのものであることが分かる。謙譲語はあくまでも日本語の部分で、それと共にこの謙遜の文化も日本文化の一部であるのである。となると、謙譲語が通じる範囲では日本の「外」にいるものは本来なかったもので、誰に対しても日本をへりくだる必要がなかったのである。すなわち、日本を日本語で謙虚に言う場合がなく、そうする文化が生じていないというように考える。

しかし、今の時代になると、状況が変動してきた。日本語が話せる外国人がますます増えてきたし、世界がグローバル化する中、日本も世界との共同活動やコミュニケーションを余儀なくされてきた。そのため、（ハンガリー人の私が言うとおかしいかもしれないが、）日本人は態度の節操や一律性を維持するために、外国人と対話するとき、日本そのものもへりくだる「内」のグループに含むか、あるいは逆に自分のこともへりくだらないようにするか、どちらか一つを選ぶ必要性が起こっているかのように思う。

以上をまとめると、以下のようになる。謙遜や謙讓語の使用は有力な社会的手段である。しかし、個人としての自信や成功のさまたげにならないように気をつける必要がある。また、現在の日本文化には、謙遜の文化と噛み合わない現象がいくつか見受けられる。その中一番著しいのは国のレベルでは謙讓語が使用されないことである。日本は様々な面では非常に発展している且つ豊かな国であるので、誇りに思う根拠が充分にあるとは思いますが、他の国を軽視するような態度をとると、それはコミュニケーションとして謙讓の原理と矛盾しているものがある。そこで、謙遜の文化と日本にかけた誇りの対決を解消させる必要がある。

(3,638 文字)